

# 末黒野

すくろの

6月号 (通巻862号)



# 花馬酔木

松本三千夫

紙雛の引目鉤鼻幼くて  
横須賀はトンネルの町木々芽吹き  
春灯のあたりから明るし妻寝ねて  
春宵は金撫で肩の洋酒瓶  
珈琲の香と文庫本春の宵  
蛇出でて人の世なまめかしくなり  
角を持つものやはらかに春の雪  
花馬酔木鉄扉を押せば鉄の音  
春暁や風神住める雨の音  
花万朶墓域声なきこゑあげて  
夜桜や二棟並びて神輿庫  
鳥ごゑにリズム崩さず畑打女

# 花ふぶく

紅梅や大きな夕日入るところ  
空回る作り水車や春寒き  
燕来る山河の晴を讚へつつ  
音といふ音のほどなく芹の川  
時もたぬ波の寄せくる春の闇  
海鳴りの遠く聞ゆる朧かな  
佇つ浜に近づく漁船鱒東風  
たんぽぽの絮や列車の風さそふ  
千の木に千の相あり花ふぶく  
みどり児の手より大きく花辛夷  
苗札の木箱にわたる海の風  
真向ひの霧立つ山や芽吹き初む

黒滝志麻子

(副主宰)

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 猫柳

森清堯

一禽の杜の一声冴返る  
海光のとどく洋館花ミモザ  
堂出でて足に纏はる余寒かな  
谷戸渡るやはらかき風迎春花  
ゆく水の残すひかりや猫柳  
春愁や縁の柱に背をあづけ  
けふの色きのふの色や落椿  
嘴を先へ先へと鴨帰る  
小綬鶏の目覚めうながす朝かな  
引潮の波に逆らひ残る鴨

## 下萌

森清信子

水音をまとふ朝日や露のたう  
日を碎き大きく曲る雪解川  
谷間の風にひるまず梅真白  
月光の我射る白さ冴返る  
海光のまともや木の芽ひしめきて  
赤き血の脈打つやうや落椿  
落日の空に紛れず花辛夷  
下萌やワインの眠る森の蔵  
春禽は光のつぶて空真青  
池底に届く日差や蝌蚪の紐



# 草の餅

安齋久英

とんとんと蕎麦切る音や春の音  
波の音風音に佇つ余寒かな  
春浅し波が波呼ぶ渚道  
ゆつたりと刻を流せり春の川  
日の当たる縁に客待つ草の餅  
中空に鳶を放てる霞かな  
春寒や入江に戻る生簀船  
梅薫る一遍像は素足にて  
沖の帆に春の来てをり実朝忌  
鳥帰る雲の切れ間を縫ひながら

# 春兆す

石黒興平

命綱つけて枝打ち鋸の音  
草田男の雪も斯く降り続きしや  
満席のリムジンバスや春きざし  
水底に光るものあり春きざす  
結局は五輪見てをり春炬燵  
藍瓶の吐息めく泡春動く  
春耕や鋤に打たる己が影  
耕人の鋤手離さぬ会積かな  
春耕やシエア農園の親子連れ  
梅が香や著き柎目の薬医門

# 彼岸

田中臥石

雛あられ食む満潮の海の音  
雛の夜の妻と茶請けの梅醬  
春陰の白湯や九谷の麿茶碗  
駅出でて踏鞆ふみけり春一番  
艦綱を沖へ引つ張る春嵐  
観梅の宴や串カツ鯨肉  
空海の歩きし道や木の芽雨  
白梅や青丹の空の風の音  
妻のはは眠る墓なり彼岸時化  
東京も彼岸の雪となりにけり



# 乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



梅の花 吉田きみえ

一筋の小川の光る雪野かな  
一碧の空にくつきり枯櫂  
日和得て春禽の声にぎにぎし  
梅の花活けて客待つ昼下り  
母の忌や庭の花菜を供花として  
春雪の晴れて暮しの音始まる  
雪解や芝の湿りの踏みごこち

金 盞 花 堺 昌 子

春の蝶 今村千年

寒鳥休みなく田をつつきをり  
老梅やりすの横切る寺詣  
神苑の満を持したり寒ぼたん  
母の指し母と子の指す金盞花  
高空の飛行機雲や辛夷の芽  
三椏の花や眼下の町ひらけ  
池の端の柳の芽ぶき鮭はぬる

爆音の頭上通りぬ春寒し  
春光ややぐらの奥の五輪塔  
実朝の墓所へ梅が香供へけり  
鯉群れて春寒緩ぶ源氏池  
風と来て肩に止まりぬ春の蝶  
邂逅をひとに言ふまじ初蝶来  
盛り場の少女の群れや春の暮

麦青む

岡田史女

缶珈琲

小田嶋野笛

野焼きせる漢や肩をいからせて  
舳先みな沖へ向きたり鱈東風  
鎌倉の余寒うべなふ実朝忌  
若布刈る漢へ波の寄せ返す  
昨日雨水けふは多喜二忌兜太逝く  
蕉翁の句碑の片方や麦青む  
浚渫の船の行き交ふ春の河

浮棧橋

岡野里子

うつろ木の梢色めき風光る  
春愁や浮棧橋の軋む音  
海光の岸辺に芽ぐむ桜かな  
市旗国旗なびく棧橋春の風  
日溜りの小屋根に弾み恋雀  
置き石の産地は紀州梅香る  
のどけしや小箱にひかる寶貝

寒明の今朝より目指す模範主婦  
缶珈琲パツカンと開け春来る  
出汁の香の駅の蕎麦屋や春寒く  
獺祭やヒトまた絶滅危惧種やも  
如月や形見を着るを供養とし  
春風の生まるる道や鳥の声  
積塔や我が独眼を宝とも

春潮

加藤静江

下萌の小さき庭の湿りかな  
春潮や今は礁の和歌江島  
一湾の全景きらら卒業期  
ベイブリッジを背に漢若布刈る  
帆船の帆のたたまれて雲雀東風  
地に触れぬ寺の要の枝垂梅  
動かざる鯉の尾鱗や冴返る



# 青炎集

## 松本三千夫選

東大和 谷口律子

凄まじき囁り釈迦の悟りの地

ガンジスにすくとんと落ちぬ春没日

春塵のベナレスの街牛の尻

旅疲れ蕩けるやうに朝寝せる

病院の屋上小さき鳥の恋

黒土を盛る植木鉢春雲

横浜 飯田久美子

スランプや落のしゅうとめより苦言

雛の間当主の妻の顔写真

立子忌やケースの中の雛道具

久久の顔顔顔や初桜

すでにして大器の気配牡丹の芽

百合の芽五寸大輪の予感あり

大綱白星 亀卦川菊枝

古城址の虚空風鳴る梅の花

冠の少しかたぶき紙の雛

山鳩の胸の青さよ風光る

漣の光に浮きて春の鴨

一睡の夢覚め春の風邪の床

尾鰭燃え海の蒼さの目刺かな

横浜 小嶋紘一

丹沢の山並を背に畦焼く火

啓蟄や大和三山つつむ風

咲き乱るる馬酔木や山の風に耐へ

飛火野に朝の声して青き踏む

チンドン屋花菜の中をすすみけり

頬刺に強き潮の香潮飛沫

横浜 池谷鹿次

四阿は梅の香りの宿る所

晴れてゆく空まばゆしや花ミモザ

春の川艦臍の軋み響きけり

幸先よき茶柱立つや竹の秋

老いてなほ農は捨てぬと畑を打つ

大法螺を吹きて真顔や亀の鳴く

町田 伴 秋 草

雲垂れて緋寒桜も項垂れ

日脚伸ぶ暖簾くぐるに気恥かし

**寄る波に立ち向かふ岩春の海**

杖の人介護する人春うらら

境内に土筆摘む人髪に風

神木の垂踊らせる春の風

横 浜 梅 田 武

**誘ふは白き香りや闇の梅**

若芝やプレーボールの声高く

ばら芽ぐむ齡十九の兵の墓

春ごたつ投句済みたる安堵の夜

芽やなぎや少女黒髪なびかせて

名残雪兜太追ふかに直人逝く

横 浜 岩 上 行 雄

ウインクの信号を待ち春寒し

曳き売はほまちの嬭花菜買ふ

湿布葉じんと効かせて梅見かな

**うららかや紡ぐ仕草の手話の指**

弾みたる句会の名乗り彼岸入り

老桜や幹に噴きたる花いくつ

横 浜 神 谷 さ う び

梅匂ふ山ふところの浄土めき

料峭や水琴窟の音の高き

木々芽吹く能楽堂の鎮もりて

**芹の水光織り交ぜ過ぎゆきぬ**

春の池滲める木々の影を置き

存分に水脈を広ぐや残る鴨

横 浜 上 月 智 子

**路地奥は書道教室猫の恋**

薄氷や大樹の影の淡き青

春昼やグラスのワイン桜色

破りたる穴より日差し春障子

啓蟄や石組みの井の縁に草

タバコ屋の脇に灰皿シクラメン

横 浜 及 川 照 子

産土の宮の丹の橋梅の花

兜太逝く甲武信ヶ岳の春寒く

囀や裏参道の鎮もれる

実朝の歌碑によりそふ馬酔木かな

朱の椀の貝の香りや雛の膳

**蝌蚪の紐水の暗さに育ちをり**

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選

三尺の雪と戦ひ疲れたり

雪晴れやきらめいてゐる椿の葉

透きとほる真青なる空春立てり

水際の草の匂ひも春きざす

料峭や電柱の影道閉ざし

新潟 太田子エ子

臥す程の一枝にぼつり白き梅

絡む枝宥めつ活くる桃の花

旗の下の集ふ遍路やスニーカー

一役を辞すや故無き春つれひ

古刹門の千のあかりや白木蓮

横浜 松橋 輝子

堅香子の花を揺らすや平成風

日面にただ咲く一人静かな

風光る学校帰りの大袋

鳥帰る航路の果ての国境

純白の一樹をさらに春の雪

横浜 加藤 直人

薄氷に透す流れや今朝の湖

早春の風まだ固し厨窓

梅林の眼下に碧き浦賀湾

谷戸深くやはらぐ風や犬ふぐり

手作りのぬくもり吊し雛飾

横浜 五十嵐富士子

あの梢あたりに今朝も初音かな

啓蟄や耳輪片方ボケットに

もののふの通りし谷戸やすみれ草

野阜の白話草や風の中

春の日の刻ゆつたりと乳母車

横浜 峰 幸子

カクテルの泡立つ赤や春の宵

鍼を打つ細きベットや春寒し

春風や初診の鍼を打ち終へて

鱈焼く味噌の焦げ目や吟醸酒

税理士の捲くる紙音春近し

横浜 長谷川はまゆう



白椿

小川 玉泉

(名誉顧問)

宮島の潮の香りの牡蠣を剥く  
春めくや汐入川の鯉の群  
ちんまりと妻の愛でたる内裏雛  
ほのぼのと下枝を飾り白椿  
窓越しの日をたつぷりとシクラメン  
下校児の上ぐる喚青春の雷

雑記帳 11

昔から言われてきた、暑さ寒さも彼岸までの  
気候の循環が、狂っているように思う。科学の  
進歩を万能と信じて、他人への思いやりの心が  
置き去りにされていないだろうか？